

三国志 中国

中学生の頃叔父が吉川英治の三国志を書店から取り寄せていたのを拝借し、辞書を片手に夢中になって読み耽った。中国の地名や人名に馴染みなく、登場する人物も多く人間関係も入りくみ難解だったという印象がある。読後は面白さよりも長編を読み切った高揚感をはるかに勝っていた。当時の日本は貧しく、海外へ出かけるなど夢のまた夢の時代であったが、中国には心惹かれるものがあって三国志に登場する地にはいつか訪れたいと、世界地図をなぞりながら想像を膨らませたものである。

1972年9月田中角栄総理と中国政府の周恩来首相が署名し日中国交正常化になった。かつての中国は鎖国まがいの地であったが、わずかの間に目覚ましい成長を遂げ日中間の交流も深まり、2022年には日中国交正常化50周年の節目の年を迎えた。

中国の地を踏んだのは1987年である。当時を振り返ると北京の天安門広場は自転車の洪水であったし、人々は濃紺や黒の人民服を着ていて、今の中国の姿からはまったく想像もできない時代であった。その後公私にわたり何度か訪中し、遙かな昔胸をときめかして読んだ三国志の舞台である蜀の都であった成都へ行くことができた。

成都・重慶は四川盆地の大都会であるが、古くはこの地は巴蜀と呼ばれていた。巴蜀は穀倉地帯の豊かな土地である。空から見る成都是霞がかかったようなぼんやりした中に浮かびあがっていた。抜ける様な青空を見慣れた目には梅雨空のような鬱陶しい感じがするが、これがこの地方のいつもの空だと説明を受けた。

さて三国志は誰もがスケールの大きさに魅せられる気宇壮大な国盗り物語である。三国志に登場する人物は沢山居るが主役は劉備（字は玄德）、孫権、曹操、それと諸葛亮（字は孔明）であろうか



劉備玄德



関羽



張飛

184年、後漢滅亡の導火線となった黄色い布を巻いた農民の反乱を黄巾の乱というが、劉備らは反乱を鎮める討伐で武勲を示す。黄巾の乱を鎮圧した後は群雄が互いに覇を争う乱世となっていく。広大な中国を初めて統一した秦を破り、次の政権を担ってきた漢王朝は220年、後漢をもって滅び三国が覇を競ういわゆる三国志の時代へと移っていく。

劉備の生まれは華北の河北省である。劉備は偉丈夫の関羽と張飛と義兄弟の契りを結び、生まれは別だが死するときは共に誓い合う。諸葛亮は劉備に三顧の礼をもって迎えられた。劉備47歳の時である。26歳の諸葛亮（以下孔明）は劉備に仕え、蜀の国の軍師として大きな存在となっている。

孔明は乱れた国の世情を見て天下三分の計を劉備に進言する。それは中国を三大勢力に分け、北方は曹操の魏、南方は孫権の呉、巴蜀は劉備の蜀となすというものであった。



秦の時代に完成した都江堰

歴史を遙かに遡ると秦の時代の李冰が完成させた治水ダム“都江堰”によって成都盆地全体が潤い豊かな穀倉地帯となったのであるが、蜀の劉備はこの豊かな穀倉地帯をおさえたのである。

魏の曹操は華北を平定し洛陽を都とした。中原（黄河流域の現河南省一帯は中国の最古の王朝ができたところ）を制したのは曹操である。皇帝を自軍に迎え、朝廷の武将である呂布に勝ち、ついで強力な武将である袁紹を追い落とした。そしてライバルの劉備や孫権を滅ぼし中国全土を手中

にすべく動き出す。

呉の孫権は以前から長江下流域の豪族であり南京を都とした。蜀は劉備が力をつけ四川・湖北を勢力下に納め成都を都と定めた。時は邪馬台国卑弥呼の時代である。

三国志のハイライトの一つは長江を舞台に繰り広げられる“赤壁の戦”であろう。208年魏の曹操は劉備軍を破り魏の大軍は長江を下っていく。呉の孫権の水軍は長江を遡上し、蜀の劉備軍と呼応して曹操軍を迎え撃つべく虎視眈々と待ち構えた。そして赤壁で相まみえる。

呉軍は操船にたけていたが、一方の魏軍は操船に不慣れで船酔い者が続出し止む無く、船の揺れを抑えるため船同士をつないだ。赤壁の戦は天も味方し東南の強風が吹きつづいた。呉軍はそこへ焼き討ちを仕掛けると繋いだことが災いして船が次々炎上して行く。数の上では不利であった呉と蜀の連合軍は、曹操の100万ともいわれる大軍を打ち破ることができたのである。

時うつり劉備軍の名将で義兄弟の契りをむすんだ関羽は、呉の孫権が魏の曹操と手を結び、孫権の率いる戦に敗れ捕らえられ首をはねられた。胴体と切り離された首は曹操のもとへ送られた。曹操は湖南省洛陽の郊外に廟を建て関羽の首を丁重に葬った。

後の人々は関羽の主君劉備に対する忠義心に感じ入り関羽を神と崇めた。そして信義を重んずるが故か関羽を商業の神として国の内外に関帝廟を建て敬った。横浜中華街にも立派な関帝廟があり訪れる人々が立ち寄り大変な賑わいを見せている。

ところでもう一人の義兄弟張飛は勇猛な武将であるが、その最後はまことにあっけない幕切れであった。出陣を控えたある日、部下の刃にかかりあっさり殺害されてしまう。部下は張飛の首をひっさげ孫権のもとへ走ったのである。

義兄弟の関羽の死にたけり狂う劉備は、孔明らの反対を押し切り孫権を打つべく長江を下り、孫権軍を追い詰めるも、蜀軍は敗れ劉備自身は病を得て白帝城で死期の近いことを悟り、孔明を呼び寄せ「息子劉禪が優れているなら支援を願いたい、もし眼鏡にかなわなければ孔明が君主に」と告げる。

孔明は遺児劉禪に出師の表を奉げ、最強の魏攻略の戦いを始めるも一進一退の攻防が続く中、孔明は病に勝てず遂に五丈原にて没してしまう。劉禪は暗愚であった。劉備の死後40年、孔明の死後29年で蜀は261年に滅んでしまう。

魏では曹氏の王朝が倒れ晋となる。呉の朝廷は皇帝孫権が没すると勢いが無くなった。力を付けた晋王朝は呉を攻め、遂には呉の皇帝孫皓が晋の軍門に下り呉も滅ぶ。ここに100年に及んだ三国志の時代は終わることとなる。280年晋が中国全土を統一し、その後316年まで36年間存続する。

古代中国の黄帝から前漢の武帝に至る二千数百年にわたる中国の歴史、中国の正史を書いた司馬遷の「史記」と同じように、晋の陳寿（233年～297年）によって三国志は書かれた。この三国志の中に「倭人伝」が書かれている。中国の正史の中で古代日本が初めて登場するのである。

夕闇迫る中、成都にある武侯祠を訪れた。建屋に入ると派手な色彩に彩られた英雄たちの姿が目飛び込んで来た。劉備はいかにも大人風に、関羽は豪傑風で張飛は目を剥いた恐ろし気な將軍といった具合にほぼ想像していた通りに並んでいた。



武侯祠の門

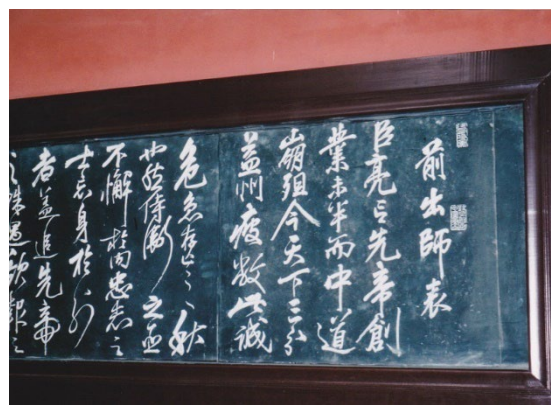


劉備の墓、おくり名「漢昭烈之陵」

成都にある武侯祠は劉備の廟であったが孔明もまつられている。門には劉備のおくり名「漢昭烈廟」と書かれているが、



後ろは劉備の墓



郭沫若筆になる出師表

と書かれているが、君主と家臣が一緒に祀られている珍しい祠堂となっている。

劉備は白帝城で没し遺骸は成都に運ばれ埋葬されたが、墓は意外に小さく土饅頭のようなであ

った。武侯祠には入口の扁額と孔明が劉備の遺児劉禪にささげたという出師表があるが、いずれも郭沫若の筆になる見事な字面であった。

余談だが中国文明は早くから文字を持っていた。文字が書かれていたのは亀甲や竹簡・木簡であった。紙は105年に後漢の蔡倫の工夫によって実用化された。実用化された紙は世界に伝わり諸方面に底知れない大きな影響を与えた。